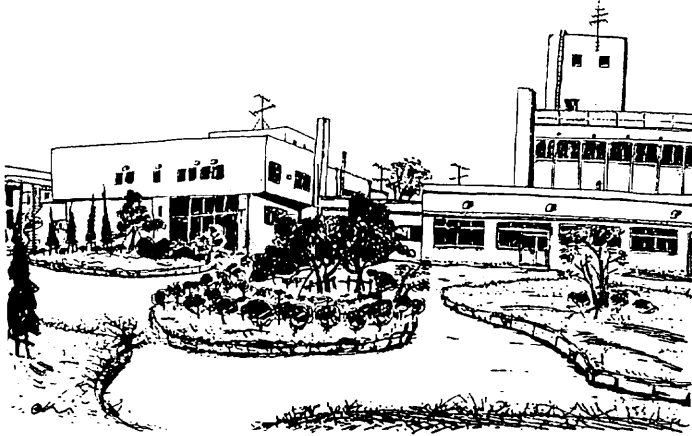


第 35 号 (昭和60年 6 月)

秋 田 県

教育センターだより



目 次

| | |
|---------------------|---|
| 巻頭言 「研修の体系化の中で」 | 1 |
| 昭和60年度事業の運営方針と計画 | 2 |
| 希望研修講座の増設 | 3 |
| 随時研修のご案内 | 3 |
| 調査研究委員会の活動とその展望 | 4 |
| 今年度の研修員 | 4 |
| 県内教育研究機関協議会の活動 | 5 |
| 第20回全県児童・生徒理科研究発表大会 | 5 |
| 昭和60年度予定刊行物 | 5 |
| 秋田県教育センター機構と担当者一覧 | 6 |
| 昭和60年度所員研究発表大会について | 6 |
| 図書資料室のご案内 | 6 |
| 人事異動 | 6 |

研修の体系化の中で



所 長 柳 館 豪 一

本年3月「教職員研修体系」が、「学校教育指導の基本構想」にのっとって策定された。

教育センターにあっても、教職経験や職能・分化に応じて行われる経験年次別の研修や職務別新任者研修といった「基本研修」、各教科や道徳、特別活動、生徒指導、進路指導、学校経営といった特定の領域・内容に関して行われる「専門研修」というふうには、研修の枠組みが明確にされた中で、センターとしての業務そのものも、一層の充実を求められ、内容によっては質的な転換を図らなければならないものも出てきている。

早急にできるものから、その一步を踏み出そうというわけで、今年度から、希望研修の講座を大幅に増やし、講座の内容によっては地域別の講座に模様替えを図るなど、その一部はすでに実施に移している。しかし、体系化のねらいに沿ったものにするためには、もう少し時間をかけ、準備していかなければならないものもあり、このことについては、現在、所員一同知恵をしばっているところである。

こんな折のせいであろうか、日本専売公社民営化にあたっての新聞の全面広告の活字を思わず知らず追っていた。一企業体への変身表明といった感があり、しかもバイオ技術をいかした花たばこを鑑賞用として早々に売り出す等、その取り組みもまた、素早いものである。同じ転身といっても成長産業であるNTTと違って、今後の経営に、大変な“創意”が求められていくことであろうと思うし、それを前面に押し出している。あの「専売」であり「公社」がと思うと、喫煙の健康に対する影響を案じながらも、ある感懐を覚えたのであるが、同時にまた、その創意や機敏で具体的な取り組みが、実は私どもにとっても最も大切にしていかなければならないものであるという思いも強く持っていたから、ひきつけられもしたのであろうと思う。

センター事業が、日々、改善を加えながらも効率的に運用され、その成果を十分にあげようかどうかは一に今後にかかっているわけだが、私どもの“創意”を盛り込む様々な事業内容が、変革とまではいかないまでも、清新の気を吹きこんで、ひいてはそれが先生方の日々の営みの手に生かされ「子供達の豊かな人間性」をはぐくむ一助となることを願うものである。

昭和60年度 事業の運営方針と計画

秋田県教育センターは、秋田県教育委員会の施策に基づき、教育効果の向上を図るため、次の方針により、教育関係職員の研修、教育について調査研究並びに教育奉仕活動を推進する。

1. 教職員の研修機関として、「秋田県教職員研修体系」に基づく基本研修・専門研修を実施し、本県教職員の資質の向上を図る。
2. 教育研究機関として、教育の現状と将来的展望

に立ち、本県教育の諸問題についてその改善や解決のための基礎的、実証的な調査研究を行い本県教育の向上に資する。

3. 教育奉仕機関として、県内外の教育図書・資料を収集、整理し、広く教育関係者の利用に供する。また、各学校等が本センターを利用して行う研修への施設・設備の提供及び援助を行う。

基本研修の充実を目指して

— 経営研究室 —

このほど県教育委員会が策定した「教職員研修体系」の中の基本研修について、次のように担当する。

(1) 経験年次別の研修

従来どおり、小・中・県立学校の新採用教員一般研修講座（養護教諭を含む）を各3日間、教職経験者（5年経過）研修講座を各2日間実施する。今年度は、小・中・県立学校の各講座に特殊教育諸学校の小学部・中学部・高等部所属教員をそれぞれ含ませて行う。これらの講座には、中央講師による講演を計画し、内容の充実を図っている。

(2) 職務別新任者の研修

小・中学校関係では、新任の学年主任と研究主任を対象にした講座を行う。いずれも悉皆で2日間である。

県立学校関係では、新任の総務主任（2日）、教務主任（4日）、教頭（1日）を対象とする研修講座及び農・工・水産の新任学科主任等を対象とする校務運営研修講座を開設する。これらの講座では、基本研修の枠組みに示される重点事項を参考に、その職務に応じた研修内容を盛り込んでいくが、特に、協議・演習の時間を多く取り入れるよう配慮したい。

学習指導の充実・向上を目指して

— 教科研究室 —

各教科とも、新教育課程実施後の新しい問題点や、今後の教育の方向をにらんで、講座の内容の充実を図っている。

学習指導法の改善はもとより、新しい教材の開発等も含めた幅広い講座の運営を考え、特に英語では、L

L機器導入に伴う学習効果の向上を目指して、中・高校に初級実技講座を新設、更にイングリッシュセミナーを中・高合同の講座として復活し、英語指導助手を加えて、実践実用の英語力の向上を図るなど講座内容に工夫をこらしている。

中学校美術は金属板加工中心の講座を開設する。

講座の外部講師に、中央からは高校音楽に作曲家の菅野浩和先生、高校教学に筑波大能田信彦助教授をお招きしており、社会、国語は秋田大学から新野直吉教授、佐藤稔助教授においでいただき密度の濃い講座となるように配慮している。

なお、郷土学習資料音楽編（57年度）を受けて、更に授業の中に取り入れ易いようにするため「わらべ歌編曲資料集」を今年度中に作成し、各小学校へ配布、指導に役立てていただく予定である。

時代の要求にこたえる授業改善を目指して

— 教育工学研究室 —

教育工学的手法を用いた学習指導法の改善を目指して内容を精選しているが、専門研修としての立場から新しい技術の普及にも力を入れたい。今年は特に希望の多かったカラー写真の焼き付け技法と、カラーTP製作を中心とした講座を持ち、時代に即応した教材製作技法の向上をねらいとしている。また、機器の操作技術と指導技術の向上を重視しながら、即授業に役立つ技能の習得を目指している。

今年の研修講座は、「教育工学基礎」では、初心者を対象に、教育工学的手法による目標分析や、学習指導プログラムの作成を通して、教育工学の基礎の習得と実践を深める研修をする。「視聴覚機器初級実技」

では、TP、スライド、VTRの初歩的な機器の操作とソフト製作の研修をする。「教育工学中級」では、完全習得学習の研修と、秋大教育工学センターの見学、「個人差に応じた指導と教育機器」と題した講演を予定している。またマイコンの基礎知識と基本操作の実技研修をする。「教育機器実技」ではカラー写真の焼き付け、引伸し技法、カラーTPの製作についての理論と実技の研修をする。

実り豊かな理科学習の展開を求めて

理 科 研 究 室

本年度は、豊かな自然観を育成するために、地域のあるいは身近な素材の活用を積極的に推し進め、児童・生徒の直接経験の機会を増やすこと、発達段階を踏まえた適切な理科の学習指導の展開を図ること等を主なねらいとして、小学校の低学年理科教育、理科経営野外観察基礎、小・中・高等学校の理科教育、高等学校の理科I、小・中・高合同の理科教材製作（教具製作、科学写真、岩プレ製作・観察、ガラス細工）と野外観察（生物）等の講座を実施する。

なお、野外観察基礎、野外観察（生物）、教具製作、科学写真の4講座については、県の研修体系化構想と開かれた教育センターの方針に基づき、それぞれ大曲市理科教育センター、大館少年自然の家、鹿角市理科教育センター、本荘市理科教育センターを会場にして実施する（来年度以降も会場を移して継続の予定）。

室員の研究内容は、全国理科教育センター研究協議会、各学会、所員研究発表会で発表し、また、理科実験観察カード等で紹介して活用かたを図る。

海外技術研修員として、ネパールからマヘスワールシャルマ（26）さんが7月1日から来年3月31日まで主に観察、実験、指導法等について研修する。

実験実習の指導力向上を目指して

技 術 家 庭 研 究 室

小学校家庭科、高校家庭科、中学校技術・家庭科ともに、実験実習を中心とした実技を通して、指導力の向上を図っていくことを重視している。また、授業に役立つ資料の作成、教具の製作等を行い、学習指導に直結した研修内容を工夫している。現在実施している講座内容は3年計画や2年計画で行われてきているが、今年度でこの計画が終了する。来年度からは新しい内容で計画されることになる。

小・中学校パソコン講座は、年々受講者が増えているので、今年度は入門コース、初級コースと講座数を増やした。また、これまではパソコンの台数不足のため受講者に大変不便をかけてきたが、今年度は台数を増設し、充実した研修ができるように計画している。高校関係のパソコン講座は、情報処理教育の見直しと充実が叫ばれていることから、初級、中級コース等前・後期を通じて、延べ21日間75名の受講者を予定し、中央高校を会場として行われる。

希望研修講座の増設

「秋田県教職員研修体系」策定の基本構想に基づいて、専門研修関係の講座は、できる限り指定制から希望制へと切り替えていくことになった。

各教師、学校が必要に応じて自由に希望する講座に参加して研究を深めることができるようになるためである。

昭和60年度の設定講座数は64であるが、指定制のものは28、希望制によるものは36となる。

なお、希望研修講座の受け入れ人数には講座によってまだ若干の余裕があるので、校内研修、研究の充実、並びに各自の指導力の向上のために積極的に活用していただきたい。問い合わせは、講座担当係（電話 0188-32-3594内線39）へ。

随時研修のご案内

随時研修は、教育センター並びに特殊教育センターで、企画・運営する研修講座とは別に、地区または学校等を単位とする自主研修に対してその要望にこたえて開設する研修講座である。

昭和59年度、両センターでの実施状況は、7団体で、延べ日数12日、延べ人数は157名である。各県内各諸学校の先生が研修され、大きな成果をあげている。

「教育奉仕活動」は、本年度、両センターの重点目標の一つである。各学校等の要請にこたえ施設設備の提供、講師の派遣等、全面的に協力、援助する方針である。

調査研究委員会の活動とその展望

学習指導調査研究委員会

昨年度までに「観点別学習状況の評価の進め方」(57年度)、「観点別学習状況の評価の実際」(58年度)、そして「高等学校における学習指導と評価」(59年度)と「評価」を柱に据えた研究をしてきた「教育研究法委員会」を発展的に解消し、新たに「学習指導調査研究委員会」と衣がえして発足した。

我々のかかえる学習指導のいろいろな問題点や展望をもった教育的課題を明確にとらえ、学校現場ですぐ活用できるものという方向で研究を進めていくことにしてある。

今年度はテーマ研究が中心になるが、「学習意欲を高める」「個人差に応じた学習指導」等々、県内外の研究状況や実態調査も併せ、どれが要求度の高いものか、といった面も視野に入れて今後の研究に取り組んでいく。

教育課題調査研究委員会

昨年度から発足したこの委員会は、学習指導、生徒指導という領域にとらわれることなく、当面する本県教育課題について調査研究を行うことを目的としている。昨年度は、はじめに本県小・中学校の昭和59年度学校教育目標と学校の共通研究主題について、どんなものが多いか、また、昭和56年度調査と比較し、どのように変化してきているかを調べ、県教委の学校教育の指針策定の一資料に供した。二つめとして、全国各県教育センターの組織と講座内容がどのようになっているか、特に道徳、特別活動、情報処理の部門を中心に調査し、県教委の教職員研修体系策定の資料として供した。

今年度は、以上のような義務教育課などとタイアップした調査研究のほか、本委員会独自のテーマを設けて積極的に取り組んでいきたいと思っている。問題はそのテーマ(教育課題)をどのように得るかであるが大きくは臨教審、中教審、国大協、所長協など国のレベルから、秋田県総合発展計画、秋田県長期総合教育計画など県のレベルまで広く検討し、価値ある課題をとらえるようにしたい。いずれにせよ将来への展望に立ったテーマを設けることが必要と考えられる。

生徒指導調査研究委員会

昨年度の活動の主なものとしては、次の二点があげられる。

第一は、全教連の生徒指導研究協議会活動への協力であり、これは事務局が立案した「生徒指導の推進に関する総合的研究」の資料として、全県の小・中・高等学校から10～15校を抽出し、その教員を対象としてアンケート調査を実施した。その結果については、9月に札幌で行われる全国大会で報告する予定である。

第二は、本会独自の活動として「子どもへのかかわりを求めて」という小冊子を刊行した。これは、研究の一人歩きを防ぎ、教育現場のニーズにこたえる、地域に密着した開かれたセンターの活動として、現場からの強い要望に基づいて会員が研さんした登校拒否やいじめなどの今日的課題を中心に、生徒指導や教育相談で留意すべき基本的事項も加えて、問題を15項目にしぼり、これをQ & A方式でまとめたものである。

本年度の活動の中心は、小冊子に対する現場の意見や要望をもとにして、更に研究の範囲を広げ、取り扱う問題行動への対応も、子どものパーソナリティの変容を促すような幅広い面からのかかわり方の研究を深め、その成果を小冊子にまとめて、学校や関係各機関に指導資料として提供したいものと思っている。

今年度の研修員 — 3カ月研修も —

研修員制度は、教員の教育専門職としての資質の一層の向上を図るとともに、県教育充実発展に寄与することを目的に、昭和40年から実施している。

今年度の研修員は、義務教育関係が15名(小学校8名、中学校7名)、県立関係が4名(高等学校2名、特殊学校2名)の計19名である。

研修期間は昨年までと違い、今年から特殊教育関係は12カ月と5カ月、ほかは全て3カ月で、前期(5月10日～8月9日)と後期(9月10日～12月9日)に分かれている。

入所した先生方は、現場に密着した今日的課題をテーマに、研修を続けている。研修の成果は研修レポートとしてまとめられる。

県内教育研究機関協議会の活動

当教育センター及び特殊教育センターをはじめ、県内14市町村にある教育研究所、教育センター、理科教育センターが加盟している県内教育研究機関協議会の昭和60年度総会が、去る5月2日、当教育センターを会場にして開催され、役員が次のように選出された。

会長に県教育センター所長柳館豪一、常任幹事に県教育センター教育研究部長齋藤實則、同科学技術研究部長日景善右衛門、県特殊教育センター部長石井柳次、県教育センター経営研究室長森谷裕二、会計監査に鷹巣教育研究所佐藤武夫、男鹿市理科教育センター天野実。

総会后、教育研究所部会と理科教育センター部会の2部会に分かれて、具体的な事業計画について協議した。

○ 教育研究所部会

県内12の教育研究所（鹿角市、鷹巣町、森吉町、合川町、阿仁町、上小阿仁村、大潟村、本荘市、東由利町、大曲市、協和町、秋田県教育センター）では、昭和57～59年度の3年間、生徒指導に関する親、子、教師の意識調査を共同研究として行った。昨年度「親の意識調査（第2次）」を刊行し、ひとまずこの調査研究を終了したが、今年度は、その応用、発展として、調査結果をどのように効果的に利用したらよいかを共

通の課題として取り組むことになった。これは、最近この種の調査が多くなされている割には、学校教育や社会教育などでの活用が十分でないことを反省してという意味合いもある。各教育研究所ではこの点について検討し、6月（本荘）と10月（協和）の地区研修会の際、実践例を持ち寄ることになっている。また、次年度からの新しいテーマの構築も年内に行う予定である

○ 理科教育センター部会

この部会は、鹿角市、鷹巣町、男鹿市、本荘市、大曲市、横手市、湯沢市の7つの理科教育センターと県教育センターから構成されている。

今年度の事業は、7月11日・12日の2日間にわたって男鹿半島を会場にして行われる。第1日目の午前中は秋田県栽培漁業センター技師杉山秀樹氏の「秋田県の淡水魚について」と題する講演と、それに引き続き同氏の案内で秋田県栽培漁業センターと秋田県水産試験場を見学する。午後は、男鹿半島の南～西海岸にみられる植物、動物および地質について合同で野外研修をする。第2日目は、講座等の持ち方について研究協議を行い、併せて情報交換をという予定である。特に、研究協議の内容は各教育センターの在り方にかかわることなので大きな期待が寄せられている。

第20回全県児童・生徒理科研究発表大会

この大会は、県内小・中・高等学校の児童・生徒の自主的な研究活動を奨励し、研究成果を発表し合って自然に向ける眼を広げ、豊かな自然観と人間性をはぐくむことをねらいとしたものである。

参加者も年々増加し、研究テーマを身近な生活や素材に求めるごく自然なものから、ユニークな発想で本質に迫る個性豊かな研究など研究内容も多彩で、その取り組み方も鋭く焦点化されたものが多く、充実したものになってきている。

今年の発表大会は、当教育センターを会場に、11月6日（水）高等学校の部、7日（木）中学校の部、8日（金）小学校の部と3日間にわたって開催する。多数の参加を期待している。

昭和60年度 予定刊行物

研究紀要 第17集

よりよい学級経営をめざして「小学校編」

経営研究室

秋田県郷土学習資料「音楽編—編曲資料集—」

教科研究室

教育研究資料件名目録 第18集

教科研究室

スライド・写真TPの作り方

教育工学研究室

理科実験観察カード「小学校用教材編」第9集

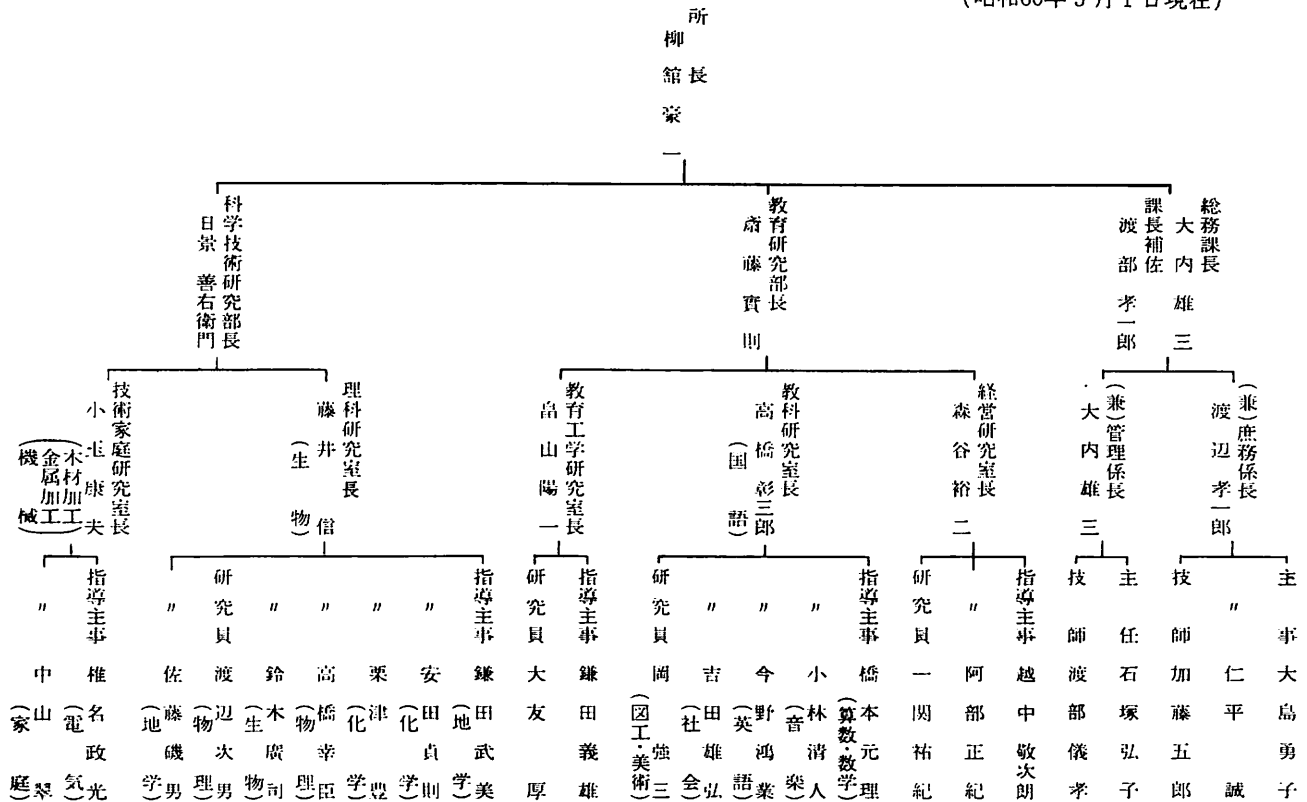
理科研究室

子どもへのかかわりを求めて（II）

生徒指導調査研究委員会

秋田県教育センター機構と担当者一覧

(昭和60年5月1日現在)



昭和60年度所員研究発表大会について

所員の研究は、センターの大きな事業として多大な成果をあげてきている。当面する諸問題の解決を目指して調査・研究し、その結果を研究発表会、刊行物等で発表して、学校や研究機関等で活用されるようにしている。本年度は、経営1名、教科1名、教育工学1名、理科2名、技術家庭1名、教育相談3名の計9名の研究発表が予定されている。研究発表会は1月下旬に行われるので、多数参加していただきたい。

なお、研究内容は、研究紀要第17集として集録し、3月下旬に各校へ配布することになっている。

図書資料室のご案内

全国の教育関係機関・団体の発行する紀要・研究報告等、センターが収集・保管する昭和59年度「教育研究資料件名目録」第17集を刊行したので、例年どおりの活用を期待している。

また、資料の提供、レファレンスサービスを求める声有一段と高まっているので、それにこたえて、十分機能できるように、単行本集についても整備、充実を図るべく準備中である。なお、教育関係の月刊紙も多数入っているのご活用いただきたい。

◆ 人 事 異 動 ◆

< 転 出 >

| | | |
|------|-------|--------------|
| 課長 | 貝田 良治 | 県立盲学校事務長へ |
| 部長 | 塩田孝三郎 | 六郷高等学校長へ |
| 室長 | 須釜 宣夫 | 横手高等学校教諭へ |
| 指導主事 | 前田 登 | 西目農業高等学校教頭へ |
| 指導主事 | 松田 至弘 | 県高校教育課指導主事へ |
| 指導主事 | 石塚 久子 | 大曲農業高等学校教諭へ |
| 主 事 | 佐藤 実 | 県立図書館主事へ |
| 研究員 | 富山 良治 | 本荘市立鶴舞小学校教諭へ |

< 転 入 >

| | | |
|------|--------|----------------|
| 課長 | 大内 雄三 | 県立博物館総務課長から |
| 部長 | 斎藤 實則 | 秋田高等学校教諭から |
| 部長 | 日景善右衛門 | 米内沢高等学校教頭から |
| 室長 | 高橋彰三郎 | 県警察学校長補佐から |
| 指導主事 | 阿部 正紀 | 本荘高等学校教諭から |
| 指導主事 | 吉田 雄弘 | 県生涯教育センター専門員から |
| 研究員 | 岡 強三 | 大曲市立大曲中学校教諭から |

秋田県 教育センターだより 第35号
 発行年月日 昭和60年6月15日
 編集発行者 秋田県教育センター
 秋田市仁井田緑町4番2号